いと思ふ。

二　五體清文鑑の由來

（清文鑑。音漢清文鑑。蒙古清文鑑。四體清文鑑。三體清文鑑。增訂清文鑑。解題）

五體清文鑑は其の出來迄に、長き沿革を持つて居るのであつて、其の起原を穿鑿すると、先づたゞ清文鑑といふものゝ研究から始めねばならぬ。皇朝通志卷十一に據ると「十二年（康熙）聖祖特諭傅達禮曰、滿漢文義照字、繙繹可通用者甚多、後世子弟、漸至差謬、爾任翰林院掌院、可將滿語照漢文字彙、發明某字應如何用、某字當某處用、集成一書使有益於後學、此書不必太急、宜詳愼爲之、務期永遠可傳、其書斟酌周詳、後二十餘年始脫稿刊行、卽今清文鑑也」と見えて居る。但し今東華錄などを索して見ても、此の諭達も見えねば、また康熙十二年の後、二十餘年を經た頃にも、清文鑑が出來たといふことは見えて居ない、然しながら康熙帝の時に、初めて此の書が出來たことは勿論疑ないことで、此の以後屢々增訂せられた清文鑑の序文には、悉く聖祖康熙帝が此れを作られたといふことを書いて居り、四庫全書總目提要にも同樣に記されてある。たゞ此の編纂の年代については、果して通志の記する通りであるかどうか、疑ないではない、夫れは、後に述ぶる所の乾隆三十六年の增訂清文鑑に、康熙四十七年六月の日附けで、御製滿文の序文が附けてあることである、これは此の書の序文としては、最初のものに相違ないのであるが、これによつて考へると、これが出來上つたのは通志の記事の如く、康熙十二年後二十餘年を經た頃ではなくて、更に後なる四十七年であつたかも知れない、尤も書物が出來上つてもすぐ刊行するとは限らないから、通志の